

聖書：使徒 11：19～30

説教題：アンテオケの教会

日時：2013年12月8日

今日の箇所では福音宣教はまた新しい段階へと進みます。19 節に「さて、ステパノのことから起こった迫害によって」と記されていますが、これは 8 章 1 節を私たちに思い起こさせます。あのステパノのあかしと殉教がきっかけとなって、エルサレムの教会に対する迫害が起こり、信者たちは諸地方に散らされました。その人々が行く先々でみことばを宣べ伝えた結果、福音はサマリヤにまで拡がりました。そしてさらに北上してカイザリヤで新しい導きが与えられたことを私たちは見ました。しかしこの人々はさらに北上して、フェニキヤ地方に、またキプロス島に、さらにシリアのアンテオケにまで進んで行ったのです。ルカはこうした世界への福音拡大の導きの背後に、あのステパノの出来事があったということにもう一度、私たちの目を留めさせています。彼の殉教は決して無駄ではなかったこと、むしろそこからこのように素晴らしい祝福が取り出されて行ったことにルカは注目させようとしているのでしょう。

それにしても散らされた人々は、迫害されている身でありながら、よくもこのように主イエスのことを宣べ伝えて巡り歩いたものだと思います。彼らは一般人です。特別の訓練を受けたり、按手を受けた人たちではありません。一言で言ってこれは信徒の力です。彼らは信仰のゆえに住む所を追われて旅しているのに、福音は彼らを黙らせておくことはできなかったのです。それほどに主イエスにある救いは、それを受け取った人を満らし、その人の命そのものとなり、その人からあふれ流れるものであるということでしょう。

その彼らはこの時までにはユダヤ人以外の者には誰にも御言葉を語りませんでした。彼らは世界各地に住んでいる同胞に主イエスのことを宣べ伝えました。ところがアンテオケでは新しい状況が生じます。このシリアのアンテオケは、当時のローマ帝国においてはローマ、アレキサンドリヤに次いで第 3 の都市に成長して来た町です。人口約 50 万人、周辺地域も合わせると 80 万人の人々が住むメトロポリスでした。その町でキプロス人とクレネ人の幾人かが、ギリシヤ人すなわち異邦人にも語りかけたのです。なぜこんなことが起こったのでしょうか。一つにはそういう環境がそこにはあったからと言えます。これまで人々はユダヤ人にも語りかけて来ましたが、このアンテオケに住むユダヤ人は、他の地域以上に、異邦人との関わりが多い町だったでしょう。この地に住むユダヤ人の中には改宗者や神を敬う人が多くいたなら、なおさら異邦人と接触しやすい環境があったと言えます。またこのことを始めたのはキプロス人とクレネ人でしたが、彼らは自分たちにとって福音がこのように良いものなら、ここにいる異邦人たちにとっても良いものであるはずだと思って、果敢にそのことを始めてみたのかもしれない。

この結果、大ぜいの人々が信じて主に立ち返るとい現象が起こります。21 節に「主の御手が彼らとともにあったので」とありますように、主がこのことを導かれました。前回まで 3 回続けて見て来たように、この時は主が異邦人宣教の御心をついに示された時でした。その主

が彼らを用いて、その御心を進めてくださったのです。

このニュースがエルサレムに聞こえると、エルサレム教会は使者をアンテオケに遣わします。今回遣わしたのはバルナバです。彼は使徒の働き4章では畑を打って代金を持って来た人でした。またサウロが回心してエルサレムに来た時、誰も引き受け手がいないのを見て、彼に関わり、兄弟たちと自由に出入りできるように世話をした人でもありました。24節には「彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。」とあります。その彼が実に重要な働きをここでもします。

まず彼がしたことは、アンテオケに到着して「神の恵みを見て喜んだ」ことです。彼はエルサレムから来た人ですから、このリバイバルを見て、ある種のジェラシーを感じたとしてもおかしくありません。しかし彼はこの状況を心から喜び、神を賛美します。彼はすでにペテロの報告を聞いて、異邦人宣教の御心を受け止めていたことでしょう。それがアンテオケでこのように豊かに成就していることを見て、まず心から喜んだのです。

そして彼は人々に「心を堅く保って、常に主にとどまっているように」と勧告します。救われた時の一時的な感激や喜びのムードに浸るのではなく、常に主にとどまり続けることが大事であると彼らを励まします。このバルナバの働きによって、大勢の人が主に導かれました。

そして何と言ってもバルナバが果たした注目すべき役割は、サウロを捜しにタルソへ行ったことです。バルナバはアンテオケに来て、主がこの町でなさっているみわざを正しく洞察しました。その時、彼はここに豊かな可能性があることを見て取りました。福音のさらなる前進のための素晴らしいチャンスがあると見たのです。そこで彼が取った行動が、サウロを捜しに行くことでした。バルナバは有能な人であって、この町で自分ができる働きを一生懸命したなら、それなりのことができたはずの人です。彼はそうしてこの機会を自分の栄光のために用いることもできました。しかし彼は主の栄光のためにという観点から、この状況を見つめました。この可能性をどう用いたら良いのか。その時、彼は自分一人で働くのではなく、さらに力強い働き手がここに加わることが必要だと判断したのです。そして真っ先に彼の頭に思い浮かんだのがあのサウロでした。ここにはバルナバの謙遜が示されています。自分を持ち上げるよりも、主の栄光のためにすべてのことをしようとする人の姿があります。確かに聖霊に満ちている人です。彼はサウロに会ってアンテオケに連れて来ます。サウロはこれまでの間、タルソで何をしていたのでしょうか。ガラテヤ書1章後半から分かることは、彼はそこでも伝道に没頭していたのだろうということです。そのサウロを見出して、バルナバはサウロを説得し、アンテオケへ連れて来ます。そして二人で力を合わせてみことばを教えることに没頭したのです。アンテオケの信者たちは、これによって大いに成長させられたのでしょうか。聖書の内容、教理、信仰生活について、御言葉から熱心に学んだのです。

その結果と言えるでしょう。主の弟子たちは、アンテオケの地で初めて「キリスト者」と呼ばれるようになります。自分たちから名乗ったのではなく、外部の人々から、あの人たちはキリストの人たちだ、クリスチャンだと言われたのです。このことはいかに彼らの生活がキリスト中心であったかを伺わせます。彼らは明けても暮れても、キリストのことを学び、キリスト

について語り合い、キリストを賛美し、キリストを喜び、キリストのために働き、キリストを伝えていたのでしょう。

そしてこのような彼らが見せた素晴らしい実が、27 節以降に記されています。その頃、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来たとあります。その中にアガボという人がいて、世界中に大飢饉が起こると預言して、果たしてその通りとなりました。この飢饉は紀元 40 年代に起こったもので、ユダヤ地方はかなりひどい状況に置かれたようです。この状況に接したアンテオケの教会はどうしたのでしょうか。彼らは困難な状況にあるユダヤの兄弟たちに救援のものを送ることを決め、実行します。驚かされることは、このアンテオケの教会はまだ誕生して間もない教会であったということです。26 節の「まる 1 年の間」という言葉を考えれば、本当に生まれたばかりの赤ちゃんのような群れと言えます。ところがその彼らがさっそくここで「与える」教会となっています。どうしてこんな姿を示すことができたのでしょうか。それは彼らがキリストに固くとどまる生活をしてきたからではないのでしょうか。キリストは「受けるよりも与えるほうが幸いである」と言われました。そしてご自身、そのように歩まれました。そのキリストの姿は、私たちにとって単なる素晴らしい模範であるだけではありません。私たちはキリストの十字架上における尊い犠牲によって救われた者たちです。このキリストがくださった救いを感謝して受け取る時、私たちは、自分も少しでもキリストに似た歩みをする者になりたい、少しでもキリストに倣う歩みをする者になりたい、という志が起こされるはずでしょう。アンテオケのクリスチャンたちはまさにこのキリストに心動かされている者たちとして、世界的な飢饉を前にして、今こそ自分たちがキリストへの感謝を現わすべき時だと考えたのです。そしてそれぞれの力に依じて、進んで、自発的にささげたのです。まさにここにおいて彼らはキリストご自身を映し出すキリスト者、一人一人が小キリストであったのです。そして、この救援のものを送ることによって、教会一致の絆が深められたことでしょう。彼らはバルナバやサウロによってきちんと教えられていたのでしょうか。教会はそれぞれの群れでバラバラではないこと、ただお一人のかしらキリストのもとに一つの教会があるだけで、ユダヤ人も異邦人もキリストにあって一つの神の家族であること。その信仰を彼らはこのようにさっそく実践したのです。このようなアンテオケ教会はこれから異邦人宣教のベースとなる教会として、拠点となる教会として、大きく用いられることとなります。

以上、この 11 章後半で私たちが見るのは、何と言っても新しく誕生したアンテオケ教会の素晴らしい姿でしょう。これから祝福される教会は、最初からその兆候を示していました。果たして私たちの教会にも、このアンテオケの教会のような特徴は見られるのでしょうか。彼らが示したようなのちは見られるのでしょうか。彼らが周りの人々からキリスト者と名付けられたほどに、キリストの民であることの見えるしるしがあるのでしょうか。進んで愛のわざを行なう群れでしょうか。そのためのカギは、やはり主キリストとの関係ということでしょう。今日の箇所信者たちは主にとどまりました。バルナバとサウロを通して、主の御言葉が彼らの内に住み、彼らの内側を満たしていました。そこから一切が導かれました。つまりここに見るのは、キリストとしっかり結ばれる人たちには、どんなに素晴らしい結果が現れるかということでは

ないでしょうか。私たちもこのキリストにしっかりとどまり、この方にすべてを導かれて行く者たちでありたいと思います。主はこのクリスマスの時、ご自分を無にして私たちのところに来てくださいました。ご自身は富んでおられた方なのに、私たちのために貧しい者、卑しい者になってくださいました。それは私たちがキリストの貧しさによって富む者となり、救いにあずかる者とさせていただくためです。この恵みを真に感謝して受け取る人は、自らも主に倣う歩みをする者になりたいと導かれるはずでしょう。バルナバが勧めたように、私たちも主に常にしっかりとどまり、主のみことばを豊かに私たちの内に宿らせることを求めたいと思います。私たちがそうして主にとどまり、主が私たちの内にとどまるなら、私たちは必ず主を映し出し、良き実を結ぶ者へ導かれます。そういう教会を主はさらに豊かにご自身の働きのために用いて行かれます。そのような教会へと私たちもさらに導かれることを祈り求めて歩みたいと思います。